

『終わらないフェミニズム——「働く」女たちの言葉と欲望』

日本ヴァージニア・ウルフ協会、河野真太郎、麻生えりか、秦邦生、松永典子〔編〕、
研究社、2016年

〔評者〕

王雅溶

WANG Yarong

前衛的モダニズム作家ヴァージニア・ウルフは、『自分ひとりの部屋』等の著作によって女権運動の先駆的存在とも見なされる。フェミニズムが様々な変遷を経てきた今日、私たちはウルフからどれだけ遠くに来たのか。あるいは、今なおウルフのすぐそばに留まっているのか。日本ヴァージニア・ウルフ協会により編まれた本書は働く独身女性、ケア労働、ポストフェミニズム、新自由主義、第三世界女性といったフェミニズムの最前線のテーマから、フェミニズムの系譜学を目指し、これまでのフェミニズム文学、文化を再検討する。

4部で構成される本書は、イギリスの普通選挙が立法化された時期の文化を論じるところから始まり、現代にまで及ぶ。収録されている11の論文と10のコラムは、ヴァージニア・ウルフを共通の題材としながら、本書が焦点をあてるフェミニズムの状況に照らして、じつに豊かな話題を掘り起こしている。

本書の第1章を飾る「おひとりさまのロンドン」（大道千穂）は、ドロシー・リチャードソンの長編小説『遍歴』を取り上げ、都市における新参者としての働く独身女性（著者のいう「おひとりさま」）がどのようにして自分の居場所を見出したのかを問題にする。世紀転換期ロンドンの小さな下宿屋にある自分だけの部屋を拠点に、自らが稼いだお金で自らの望むものを購入して生活する『遍歴』の主人公ミリアムは、週に1ポイント（1ポイントは1シリング）の使い道から、一時的には働く独身女性としての肯定的なアイデンティティを確保した喜びに満たされるが、次の瞬間にはそれを失ってしまう。ミリアムが見出した週に1ポイントの可能性も限界も、当時の多くの「おひとりさま」とちと共通するものであり、後世の働く女性にも引き継がれるのである。読者は、第I部「ポストサフラジストの「自由」と消費文化」において、ポストサフラジスト期、つまり1928年の普通選挙の立法化に前後して、第一波フェミニズムの目標が一応達成された時代と、私たちが生きるポストフェミニズム時代の意外な共通点を見出すのではないかと。それは、女性たちが新たな「自由」を手にしたけれども、

反面でその「自由」に苦しむような状況である。

第Ⅱ部は、専業主婦／母親たちの存在意義をフェミニズムが扱いあぐねてきたことに向き合う。第4章の「距離というものには大変な力が——『灯台へ』に見る労働者としての「母」と子供の観察運動」(矢口朱美)においては、労働者の中でも特に「母」という形象に注目し、イギリスにおける心理学の発展期の作品として『灯台へ』を歴史的に位置づけ、ラムジー夫人と画家リリー・プリスコウを「母」という「労働」を行う者の表象として分析する。労働の意味を「肉体労働」のみに限定せずケアの観点から考察すれば、20世紀初頭とは「母」及び「労働」の意味が変容した時代であったことが明らかになるだろう。また本章が想定する彼女たちの「子供」は、女性からケアを受けたラムジー氏と、彼女たちによる慈善活動の対象とされる労働者階級の人々である。彼らをあえて、「子供観察運動」の文脈における「子供」と位置づけることにより、家父長的父親の女性に対する依存的イデオロギーが、当時の中産階級からみた労働者階級の表象と、奇妙に重なり合うさまを明らかにした。

同じく第Ⅱ部の第6章「ヴァージニア・ウルフと「誰も生」——『波』におけるハイ・モダニズム、キャラクター、情動労働」(秦邦生)でなされる分析の背景となるのは、ウルフが『波』の初期草稿に“the life of anybody”という副題を付けていたことである。ウルフがこの作品で模索していたのは、現実の社会的制約を超える真に包括的な「生」の表象だった。だがこの副題が後に削除された事実は、そのような試みが逢着した根源的な困難の存在を暗示している。すなわち、20世紀初頭の社会変革の中で実際に起こっていたのは、住み込み使用人から通いの雑役婦への労働形態の変化でしかなかったということだ。低賃金の家事手伝い労働は、相変わらず階級関係を規定し続けていたのだ。たとえ「誰も」が抽象的な意味では「生」を共有するはずであったとしても、その「生」の内実には、様々な断層が走っているのではないか。本論で明らかにされた召使いへの依存と依存嫌悪に引き裂かれたウルフの葛藤は、ケア労働にともなう自立と依存の相克というフェミニズムの現代的ジレンマにとらわれた私たち自身の姿に通底する。

続いて第Ⅲ部「ポストフェミニズム状況下の労働と共通文化」は、一気に時代を駆け下り、現代のフェミニズム文学を探求する。女性による女性のための文化は、そのような文化を生産する共同体は、可能か？ この問いをめぐるそれぞれの世代における「働く」女たちの「自伝」的文学作品に限らず、映像作品などの多角的な視点から、女性の連帯を可能にする条件を考察する。

第Ⅳ部では、21世紀における時間と空間を超えた新たな女性たちの連

帯が検討される。フェミニズムは、複雑な旅程を辿って現在の私たちの手に届いている。そのような「フェミニズムの旅」のありさまを検討するのが、この最後の部分である。

以上、本書に描かれたウルフないし本書が目指すのは、女性の「連帯」である。つまり、物質的利害やアイデンティティを共有することに基づく女性の共同体である。第二波フェミニズムは、政治的批判を携えて女性の解放を目指したが、その方向性はいつしか流動的な労働力を求める新自由主義と一致してしまった。その結果、女性を労働力として組み込むためにジェンダーや人種のイデオロギーが資本主義に取り込まれてしまった。だが、そのような女性の位置づけでは、国境を越えた女性たち共通の利害と連帯の確立につながらないのではないか。

女性の連帯を訴えたウルフ自身が不労所得で生活していたことはよく知られている。ウルフ夫婦が経営するホガース・プレスは、1931年に労働者階級の女性たちによる自伝集を出版しているが、それに序文をよせてウルフは、中産階級と労働者階級の間の「障壁は超えられない」(Woolf, "Introductory Letter", xxviii, Margalet Llewelyn Davies, *Life as We Have Known It, by Co-operative Working Women*, Hogarth Press, 1931.) とはっきり記している。第6章において確認されたジレンマのように、たとえば学界の日本ヴァージニア・ウルフ協会のメンバーと第三世界の女性労働者とを単に女性だというだけで同列には扱えない。商品化された様々なケア労働は、現代ではしばしば貧困国からの女性移民労働者たちによって担われている(バーバラ・エーレンライクらが指摘するように、1970年代以降の貧困国から富裕国への女性移民ケア労働者の増加は、前者からのケアの流出、剥奪である)。そして研究者たちは多かれ少なかれ低賃金ケア労働に依存しているであろう。そこには、国、人種、階級などの境界は厳然と存在する。

そうした矛盾を不問に付すのではなく、むしろそれを直視することから本書の意義が際立ってくる。なぜならば、矛盾が見えるその現象自体にこそフェミニズムの本質があり、そこからフェミニズムを前進させるためのヒントが隠されているからだ。本書は文学作品のみならず、様々な映像作品、またポピュラーな雑誌記事などの「言葉」を媒介にして、働く女たちの「欲望」を伝達し、共有する。言葉が欲望へ、欲望が連帯へ、「言葉」と「欲望」の交錯点において、フェミニズムの系譜が浮き彫りされる。だがフェミニズム研究者たちの「言葉」は、働く女性の「欲望」をぴったりと伝達できるのか。本書はむしろ逆説的に、フェミニズムのジレンマを直視することの重要性に改めて気づかせてくれる。